

審査にあたって

審査委員長 大 高 泉

はじめに

研究論文集の刊行は令和7年度で第49回を迎えました。実に半世紀近く、本県の実教育現場の先生方が、「教育に関する研究論文」（以下、「教育論文」と略記）を作成し応募されてきたことに思いを馳せますと感慨深いものがあります。目下、教員の働き方改革が進展中ですが、昨年公表された「OECD国際教員指導環境調査（TALIS）2024」の報告書によれば、日本の小・中の教員の仕事時間は、前回の調査（2019）よりは少なくなったものの相変わらず調査参加国・地域の中で最長で、まさしく働き方改革道半ばと言わざるを得ません。そうした多忙を極める中で、「教育論文」を作成されました先生方の研究への熱意と取組に改めて深い敬意を表します。

1. 応募状況と審査結果

令和7年度の「教育論文」の応募総数は83編で昨年度より8編増えました。応募者の年齢を見ますと30歳代が約37%を占め最多で、40歳代（約28%）、50歳代（約18%）と続きます。30、40歳代の教員が70%近くを占め、教育実践とその研究を主導する役割を担っていて今後の本県の教育の充実・発展に大いに期待がもてるのではないのでしょうか。

応募者の校種では、小学校の教員が圧倒的に多く約64%を占め、中学校の教員が約22%で続いています。なお、夏の教育論文セミナーに参加された教員からの応募も13編あり、全応募数の約16%に上りました。研究の組織ではほとんどが個人研究で約88%を占めています。残りは共同研究ですが、そのうち学校全体を挙げての共同研究は6%でした。

研究テーマをキーワード別に見ますと、ICTが8編、生成AI、ウェルビーイング、自己調整（学習）、コミュニティ・スクールがそれぞれ4編となっています。ICT、生成AI、自己調整は30歳代中心、コミュニティ・スクールは50歳代中心となっています。

厳正な審査の結果、最優秀賞1編、優秀賞4編、優良賞16編、奨励賞6編が確定しました。入賞論文の内訳も昨年度とほとんど変わりませんでした。入賞されました先生方に心よりお祝い申し上げます。入賞論文は、最優秀論文を典型・頂点にして、いずれも独自の着眼と主題設定、明確な仮説設定、手堅く的確な研究方法の選択、実践を積み重ねた各種データの収集・蓄積・分析、広汎な関係資料及び文献の渉猟、妥当な結論の導出、残された課題の確定など、研究の基本を着実に踏まえた力作揃いで、応募された先生方の教育実践研究の力量の高さを示すものでした。入賞論文名を全てあげることはできませんが、最優秀論文名のみを挙げますと次のとおりです（敬称略）。

・中島佳代子、結城市立結城西小学校・教諭、共同研究（学校全体）：

「読む力を高め、考えを表現する国語科指導の在り方～説明的文章における逆向き設計と学び合いの工夫を通して～」

2. 最優秀論文から学ぶ

中島佳代子教諭を研究代表者とする最優秀論文は、次の点等で優れた模範となる論文です。

優れた主な点を挙げますと、第一に、読むことと書くことを断片的に扱っているという当該校の国語科指導に共通する具体的な課題を把握し明示していること、第二に、「逆向き設計」に基づく単元構想と学び合い活動の工夫という明確な方法論を提示していること、第三に、この「逆向き設計」に基づく単元構想と学び合い活動の工夫により、説明的文章を読み取る力と根拠を明確にして表現する力を高める2ヵ年度にわたる実践的研究であり、しかも学校全体の取組であること、第四に、児童たちが課題の記述において考えをまとめる視点の明確化、文章表現の字数や時間の制限を明示した「児童ワークシート」の作成・活用、児童が自分の考えの基礎となる情報や気付きを得るインプット活動を支援する「学びのタネコーナー」の設置、対話の中で他者の話を聞き取り、要点を文章でまとめる「聞き名人」の活動、単元のゴールの揭示、空欄に自分の考えを記入して文章化を促す基本的な「文章の例」の提示等々、様々な工夫を取り入れ、読む力と文章表現力を高めていること、第五に、別添の資料が詳しく、またよく整理されていること。

3. 審査のポイント

「教育論文」の審査では、次の諸点がポイントになっています。①研究内容が創意に富み、その主張が斬新で、しかも論旨が明確であり実践資料が十分であること、②添付資料は、研究的に見て価値が大であること、③研究主題は、茨城県の教育目標実現のために「明日の教育を考える」という立場から、学校等の実態を踏まえ、応募者が具体的に決めたものとする。④取組が研究的で実践的であるものを重視すること。⑤連続応募の論文については、内容の深化、発展等について特に配慮すること。上記の最優秀論文は、これらの審査のポイントにほとんど合致していると言えます。

この審査のポイントに対応して、「教育論文」の作成・執筆にあたって是非とも押さえておいていただきたい具体的な点は、本論文募集にあたって明示されダウンロードも可能な、「必読!! 教育論文を書くとき、絶対押さえておきたい10のポイント」に詳細に示されています。論文作成にあたって、この10のポイントに合致しているかどうか、不備がないかどうか、入念に照らし合わせチェックしていただくことが入賞への近道になります。この10のポイントを論文作成のまさしく道標として随時参照してください。

おわりに

昨年9月に中教審の「論点整理」が公表され、従前のスケジュールに従えば今夏に審議のまとめが出されパブリックコメントを受けて、来年3月あたりに新学習指導要領の骨子となる中教審答申がなされることとなります。その中で新しい理念やキーワードが学校教育の実践を新たに方向づけることになり、それを受けてまた新たな教育研究が展開されることになるでしょう。日本の教育・学習指導要領にも大きな影響を及ぼしたOECDのキー・コンピテンシーの概念に替わり、OECDの「ラーニング・コンパス2030」ではウェルビーイングやエイジェンシーという概念が中核を占めていますが、既に今回の「教育論文」にもその影響の一端が窺えます。「学び続ける」教師にとって「教育論文」の作成は自分の実践を客観的に捉え改善に資する実り多い取組です。働き方改革が格段に進捗し、教育実践と実践研究にじっくり取組むゆとりが教師に生まれ、さらに多くの優れた「教育論文」の応募に繋がることを期待しております。